

今日の不況は「激甚災害」と同じ。全被災者に 暖かい支援をしてこそ政治…総括質疑で訴え

市議会の3月定例会が3日からはじまりました。3、4日は総括質疑でした。9党派代表9人が質疑を通告。私は4日午後、9番目に登壇し、新年度予算の編成と総合計画、市民負担の軽減策、国民健康保険税、緊急経済対策などで約1時間にわたり質疑を行いました。質疑は3回に及びましたが、1回目のやりとりの大要をお知らせします。私の質疑と答弁がずれているものもありますが、そのまま掲載しました。

新たな実施計画策定必要性認めず

【橋爪】今日の経済不況について市長などから「災害」「激甚災害」との声があったが同感だ。災害には被災者がいる。困っている人がいる。助けてもらいたい人がいる。そのことを意識して質疑を行いたい。

まず、先ほど矢野議員もとりあげた実施計画だが、昨年の3月議会でもわが党議員団代表の総括質疑に答えて、「実施計画をつくる」と約束されたはずだ。総合計画では基本計画の中に実施計画を含めたとしているが、短期の実施計画を作成しない計画がどう動いたかも見えない。なぜ、実施計画を作成し、議会に示されなかったのか、改めてお聞



きしたい。

市民負担軽減策を具体的に示せ

【木浦市長】平成19年12月議会で議決いただいた改定後の第5次総合計画では、「基本構想」と「基本計画」の2層構造とし、この「基本計画」に「実施計画」の内容を併せ持たせることとしたため、実施計画については、作成しないこととした。なお、新年度予算は、第5次総合計画等に基づく施策を計画的に実施するため、総合計画・財政フレーム検討プロジェクトチームで精査した、平成26年度までの事務事業調整結果を基本とし、財源の効率的かつ効果的な活用が図られるよう編成した。

【橋爪】厳しい経済状況を考慮すれば、福祉や教育などの分野で市民負担軽減に向けた予算措置が必要だということは歴然としている。どのような対策を講じたかを明らかにしていただきたい。

【木浦市長】新年度予算では福祉分野においては、子育てに係る経済的な負担軽減を更に図るため、子どもの通院医療費の助成について、特に支援が必要な保護者を対象に小学校卒業まで拡充したほか、安心して妊娠・出産を迎えられるよう、妊婦一般健康診査費用の公費助成を、これまで5回から14回までに拡充した。さらに、国からの交付金を原資として新たな基金を創設し、介護報酬の額の改定に伴う介護保険料の急激な変動を抑制することとした。また、教育分野においても、小・中学生を対象とした就学援助制度や高校生を対象とした私学助成制度などについて、これらの制度を堅持するとともに、特に就学援助費については、前年度当初に

比べ大幅に増額したところだ。いずれにしても、厳しい財政状況の中ではあるが、市民生活の安定の観点から可能な限りの対策を講じたものと考えている。

国保税は条例改正し引き下げよ

【橋爪】昨年決められた国民健康保険税率は平成20年度と21年度、2段階で税率を引き上げることになっている。このままいくと、21年度は医療給付費分と後期高齢者支援金分を合わせた場合、20年度よりも10%、一人あたりにして年額で8000円近く増える。しかし、ご案内のように、国保加入者のほとんどは自営業者だ。この税率を決めた後、急速に経済が冷え込み、みんな苦しんでいる。そういうなかで、国民健康保険税率を昨年作成した計画通りに引き上げようとしているが、条例を改定し引き下げることができなかったのか。

【木浦市長】国民健康保険は、昨年度に税率・税額の見直しを行い、本年度と来年度の2か年で段階的に実施している。また、この見直しに伴い、平成20年度に6億2000万円、平成21年度に4億3000万円を一般会計から臨時的に繰り入れるなど、加入者の負担軽減を図る措置も講じている。こうした中、新年度の予算編成では、昨年末以降、増加傾向に転じた加入者の推移や所得状況等を推計しながら、一般会計からの臨時的な繰入れを計画どおり確保するとともに、2億円の基金積立てを見送り、保険給付費の増嵩に充てるなど、加入者の負担抑制に可能な限り配慮した。国保税は、不況下における税制全般の在り方や財源確保の問題などを含め、総合的な検討が必要と認識している。



【切干大根】暖かい日差しで益々おいしい大根に変わります。写真は石谷にて撮影。

春よ来い 第一〇二回 手をつなぐ

先日、二十数年前のビデオを久しぶりに見て思わず微笑んでしまいました。このビデオは、妻の絵本作りをNHKが取材し、放映してくれたものです。微笑んだのは私が長男の手をひいて歩いている場面です。長男はまだ二歳くらい、指しやぶりをしつかり父親の手につかまっているではありませんか。

正直言って、私が子どもの手を引く、手をつないで歩いたというのはあまり記憶がありません。人間がたくさん歩いている都会へ一緒に出かけたこともありませんし、子ども会などで出かけた遊びの施設でも手をつないだ記憶が残っていないのです。でも実際はそうではなかった。買い物であれ、遊びであれ、小さな子どもたちと歩く時はいつも手をつないでいたんだと思います。ビデオを見たとき、「こんなときもあつたのか。それにしても大きくなったもんだ」と思った次第です。

このビデオを見てから、最近、親子などの手をつないでいる姿に目がいくようになりしました。意識しようとしまいと、人と人が手をつないでいるところは、けっこう目にします。保育園や学校、デパートの中、商店街の通路、駅構内などひと組やふた組はかならずいます。

このあいだ、頸城区で、オレンジ色のベストを着た、だいぶ腰の曲がったおじいさんが小さな男の子の手を引いている場面にたまたま出合いました。通学バスの停留所まで送るところです。子どもさんはおそらく、小学校の一年生か二年生でしょう。ふたりは体を寄せ合って歩き、どちらがひっぱられているのかわからないようなところがあつて、じつにほほえましい光景でした。そして、背を丸めて歩いているこのおじいさんの姿からは孫さんを大切にしている気持ちがあふれでていました。

手をつなぐのは親や祖父父母が子どもや孫の手助けをする時だけではありません。その逆のこともあります。恋人同士が手をつなぐ姿もある。障がいのある人を支えて、手をつないでいるケースもあります。たくさん「手をつなぐ」姿がありますが、そこに共通しているのは、手と手をつなぐことで人と人がつながっていること、心と心がつながっていることです。

二月の下旬。私は母を市内の病院へ連れて行きました。八〇歳を超えてもほとんど医者にかかることのない母ですが、これまで良かった視力が徐々に低下してきています。それで眼科にかかって治療を受けているのですが、受付を済ませ、呼び出しがあるまで待てばいいところまで付き添って、あとは母に任せて市役所へと急ぎました。会議があつたからです。

この日、治療が終わってから母を家に送り届ける役目は弟に頼みました。診察が終わったのは正午過ぎだったとかで、弟は仕事先で待ちきれず病院まで行ってくれたとのことでした。たまたま、病院で弟と母の姿を見かけた人がいて、その人が翌日、私に教えてくれました。「おまんちのおばあちゃん、病院で弟さんに手をひいてもらつていなかったよ」と。私は、病院で母と手をつなぐということを一度も思いついたことがなかっただけに、とても新鮮で、うれしく思いました。

私も還暦が近づいてきました。まだ体はしっかりとっていますので、子どもや妻などの世話になることはまったく想像していません。でも、人生、いつ、何があるかわかりませんね。体力が落ちて弱った時に、だれか手をつないでくれる人がいるかどうか。そんなことを考えるようになりました。

3年間の思い出を心に刻み、57人が巣立ち…吉中

市立吉川中学校の卒業式が6日、吉川中学校体育館で行われました。同校の卒業式は、旭中学校、源中学校などが統合して以来、今回で30回目になります。男子29人、女子28人、合計57人が巣立っていました。

丸山辰志校長のはなむけの言葉、宮口保PTA会長のお祝いの挨拶に続いて、在校生代表の江村祐太さんがこれまでの学校生活を振り返り、1、2年生をひっぱってきてくれた卒業生の指導に感謝。その後、卒業生を代表して永井駿祐さんが巣立ちの言葉をのべました。

永井さんもまた、これまでの学校生活の中から心に残った体育祭や校内音楽祭などについてふれました。吉川中学校の歴史の中でも初の出来事となった体育祭での両軍同点優勝については、「卒業生の心に刻まれ、吉川中学校にあっては歴史に刻まれるものとなった。クラスの枠を超えて仲良しだった（ところがでた）結果だ」とのべました。また、音楽祭に関しては「歌えば歌うほど歌詞への思いが強くなった」ことなどを披露し、みんなで取り組んだ思い出を大切にして生きていく決意を語りました。式典に参加した人たちは、一つひとつの思い出を丁寧に紡ぎだしていく永井さんの語りにひき込まれました。



今回の卒業生の中には吉川中学校で剣道を学びたいと他区から入学してきた生徒も入っています。30回も卒業生を送り出した吉川中学校です。個性ある学び舎としてさらに発展してほしいものです。（写真に指揮者の生徒さんを入れることができませんでした。お許ください）



【マンサク】代石にて28日撮影。